

パーリ修辞学書 *Subodhālaṅkāra* における〈自然的表現〉
—パーリ経典との関連と〈意味の修辞〉における位置付けを中心に—
Svabhāvavutti in Pāli Rhetoric According to the *Subodhālaṅkāra*

塩田 宝澍
SHIOTA, Hoju

摘要

The Indian science of rhetoric (*alāṅkāra*) systematizes figures of speech. While a large number of classical works on Sanskrit rhetoric have been handed down to us, Pāli rhetoric has only one extant treatise: the *Subodhālaṅkāra* written by Saṅgharakkhita. This work is regarded as important even in today's Buddhist communities—Sinhalese and Burmese monks are reported to be still studying it. However, despite decades of focused scholarly attention, it still needs to be studied further in depth.

This paper has the following two purposes. First, it aims to investigate the relationship between the Pāli canon (*nikāyas*) and example sentences used in the *Subodhālaṅkāra* and consider how the science of rhetoric in Pāli was related to the Pāli canon. Second, it attempts to elucidate the framework of the semantic figures of speech (*atthālaṅkāra*) in the *Subodhālaṅkāra*, and how that framework differs from those of Daṇḍin's *Kāvyaḍarśa* and Bhāmaha's *Kāvyaḷaṅkāra*.

The *Subodhālaṅkāra* v. 166 shows an example of the straightforward description (*svabhāvavutti*), which relates to the scene of the Buddha's birth. It is unlikely that the illustration is taken from the Pāli canon, but a commentary to the verse quotes from it. This is one of the instances that show the strong relationship between the *Subodhālaṅkāra* and the Pali canon.

The framework of the semantic figures of speech is different among the three. The *Subodhālaṅkāra* has 36 types of figures of speech, the *Kāvyaḍarśa* has 35, and the *Kāvyaḷaṅkāra* has 32. A comparison of these sets of figures of speech allows us to state that the framework of the semantic figures of speech in the *Subodhālaṅkāra* is more similar to that in the *Kāvyaḍarśa* than that in the *Kāvyaḷaṅkāra*.

Focusing to the straightforward description, there is a difference among the three. The *Subodhālaṅkāra* first classifies the semantic figures of speech into the straightforward and the oblique descriptions (*vaṅkavutti*) and then classifies all semantic figures of speech but the straightforward description as the oblique descriptions. The *Kāvyaḍarśa* treats the straightforward description as one of the 35 semantic figures of speech, but the *Kāvyaḷaṅkāra* does not acknowledge it to be a figure of speech.

Therefore, it is possible that the *Subodhālaṅkāra* did not accept the framework of the *Kāvyaḍarśa* as it is but arranged it to build its own framework.

キーワード：修辞学 *Subodhālaṅkāra attha-alaṅkāra sabhāvavutti Kāvyaḍarśa Kāvyaḍalaṅkāra*

Keywords: *Subodhālaṅkāra attha-alaṅkāra sabhāvavutti Kāvyaḍarśa Kāvyaḍalaṅkāra*

1. はじめに

パーリ語 (Pāli) は、インド・ヨーロッパ語族に属し、中期インド・アリア語であるプラークリット (Prākṛit) を代表する言語であり、スリランカや東南アジアを中心に展開している上座部仏教の正典で用いられている。パーリ語の仏教文献には他の宗教の文献と同様に文学的要素があり、修辞技法が随所に用いられているが⁽¹⁾、パーリ修辞学の文献としてはサンガラツキタ (Saṅgharakkhita、12–13 世紀頃⁽²⁾) によって著された *Subodhālaṅkāra* (以下、SBA) のみが現存している。SBA はスリランカやミャンマーの僧侶にとって今日でも学習しなければならない重要なテキストであるが⁽³⁾、その重要性にも関わらず、成立年代や成立背景、他の修辞学文献との関係等、明らかになっていないことが多い。この基本文献の研究の遅れが、パーリ修辞学全体の研究がサンスクリット修辞学の研究に比べ立ち遅れている大きな原因のひとつとなっている。

SBA に関する先行研究では、テキストの校訂出版や他の修辞学文献との比較研究がなされてきた。テキストの校訂出版の状況については、森 [1974]、片山 [1977]、橘堂 [1990] [1997: 52–53]、Jaini [2000] に詳述されている。最初に写本を校訂してテキストを公表した Fryer [1875] 以降、多くの校訂テキストが出版されてきた。その中でも、1964 年に出版されたビルマ第六結集版 (B 版) と 2000 年に出版された Pali Text Society 版 (PTS 版) は、多くの先行研究で底本として用いられた⁽⁴⁾。

一方、他の修辞学文献との比較研究については、ダンディン (Daṇḍin、7–8 世紀頃⁽⁵⁾) が著した *Kāvyaḍarśa* (以下、*Ādarśa*) との関連が指摘され、主に同書との比較研究がなされてきた。例えば、Chatterjee [1960] は SBA と *Ādarśa* のテキストを並置して SBA の記述を分析し、片山 [1978] [1980] は SBA の和訳を提示したうえで *Ādarśa* や他のサンスクリット修辞学書の対応箇所を指摘している⁽⁶⁾。SBA と *Ādarśa* の関係について、Chatterjee [1960] と片山 [1977] は共に、SBA は *Ādarśa* を基にして著されたと推定している。また、Jaini [2000: xvi] は、SBA が *Ādarśa* を基にしていると推定する根拠として、次の 3 点を示している⁽⁷⁾。すなわち、SBA の v. 8、v. 26、v. 68 がそれぞれ *Ādarśa* I v. 2、III v. 1、II v. 4 を改良して作られ

たとえられる点、また SBA v. 115 において SBA は「他の専門書に基づいて著された (*satthantarānūsaraṇena kato*)」と述べられている点、そして SBA の「古註釈書」(*Porāṇa-tīkā*、以下 SBAPT) に、サンガラッキタがダンディンの書に依って SBA を記したことが示されている点である。

以上のように、SBA は *Ādarśa* との比較を通して研究されてきたが、SBA の研究において比較対象と位置づけられている *Ādarśa* は、近年、Pollock [1998] の研究において示される〈汎インド的地域語〉(Cosmopolitan Vernacular) の研究の中心に位置づけられている。Pollock [1998] によると、サンスクリット文学作品は洗練された高貴なものと位置づけられ、地域言語による文学作品は庶民的と特徴付けられるが、初期カンナダ文芸理論書は、カンナダ語で記されているものの、多くの語彙をサンスクリット語から借用し、洗練を高めている。Pollock は、サンスクリット語から多くの語彙を借用した地域言語を〈汎インド的地域語〉と表現した。そして *Ādarśa* とカンナダ語の修辞学書の比較を行い、カンナダ語の修辞学書に〈汎インド的地域語〉がみられることを明らかにした⁽⁸⁾。

この Pollock の研究に影響を受けて、*Ādarśa* と、*Ādarśa* の影響を受けた他の言語による修辞学書の比較研究が進んだ。例えば、Bronner [2012] は *Ādarśa* とカンナダ語、シンハラ語、パーリ語、タミル語、チベット語の修辞学書を比較し、*Ādarśa* はそれらの言語に翻訳され受け入れられたとしている⁽⁹⁾。これら一連の研究によって、*Ādarśa* と、SBA を含む *Ādarśa* の派生作品との比較が容易になった。しかし、*Ādarśa* 系以外のサンスクリット修辞学書は一連の研究の対象外であり、それらと SBA の関係を論じた先行研究は依然少なく、*Kāvyaṅkāra* (700 年頃?、以下、*Alaṅkāra*) との関係にも言及した Jaddipal [2010] や、*Kāvyaṅkāra* (11 世紀頃、以下、*Prakāśa*) との関係を示唆した Jaini [2000: xvii] が挙げられるのみである。パーリ修辞学の成立過程を解明するには、これらを含むサンスクリット修辞学書と SBA の関係を仔細に調査する必要がある。

筆者は、その作業の一環として、塩田 [2020] で SBA における直喩 (*upamā*) に関する記述 (以下、直喩の節) を分析し、*Ādarśa*、*Prakāśa* の記述と比較検討した結果、以下のような知見を得た。まず、SBA は全体としては *Ādarśa* に依拠したものとされているが、少なくとも直喩の節においては、*Ādarśa* 以外に *Prakāśa* から影響を受けた可能性がある。したがって、SBA の直喩の節は、Bronner [2012] が言うような、単に *Ādarśa* をサンスクリットからパーリ語に置き換えただけのものではなく、サンガラッキタが *Prakāśa* あるいは *Prakāśa* と類似する記述がなされた修辞学書を参照して執筆したものと推定できる。また、Gupta [1970: 202] は *Ādarśa* における直喩の分類は全く体系的・論理的ではないと評価しているが、SBA の直喩の節は *Ādarśa* の記述に依拠しつつ、それから逸脱する箇所によって直喩の分類を体系化しようと試みていると理解できる。

以上の研究状況から、筆者は、次の 2 点を SBA 研究における大きな課題と考えている。第一

点は、SBA とパーリ経典との関連を解明することである。SBA とサンスクリット修辞学書の影響関係はこれまで分析されてきたが、パーリ語の仏教文献との関係はほとんど研究されていない。先行研究としては、管見の限りでは Jaini [2000] のみが挙げられる。Jaini [2000: xvii] は、SBA において修辞技法を説明する際に示される例文にはジャータカ (Jātaka、本生譚、釈迦の過去世の物語) から引用したと思われるものがある、と指摘している。また、Jaini [2000: xviii] は、SBA 第 5 章に対する「新註釈書」(*Abhinava-ṭīkā*) において『ヴィドゥラ賢者本生物語』(*Vidhurapaṇḍita-Jātaka*) からの引用が見られることを指摘している。しかし、Jaini の指摘は SBA とジャータカの関連に留まり、パーリ経典との関連には及んでいない。SBA の著者サンガラッキタはスリランカの上座部仏教教団に所属していたため、パーリ経典に精通していた可能性は高く、それらの文献から例文が取られることも想定できる。したがって、SBA とパーリ経典との関連を解明することで、SBA と上座部仏教教団との関わりを考察することが可能となる。これにより、先行研究では、SBA とサンスクリット修辞学との関係に焦点が当てられがちであったが、SBA や SBAPT と上座部仏教教団との関わりを考察することで、異なる側面からパーリ修辞学の成立背景に迫ることができ、その成立背景がより一層明らかになるだろう。

課題の第二点は、SBA が独自の体系を構築しているか解明することである。SBA と *Ādarśa* の比較はそれぞれの偈の内容の比較に留まり、それぞれの修辞技法がその体系においてどう位置付けられているのかに注目していない。そのため、SBA と *Ādarśa* がどのように修辞技法を体系化し、両者の体系にどのような類似点・相違点があるのか明らかになっていない。例えば、片山 [1978] では、SBA と *Ādarśa* の偈の対応をひとつひとつ指摘しているが、その偈の取り上げている主題のみが一致しているのか、*Ādarśa* の偈をパーリ語に置き換え内容も一致しているのか、明確ではない⁽¹⁰⁾。この点について、塩田 [2020] では、SBA の偈を① *Ādarśa* と記述内容が一致している偈、② *Ādarśa* と取り上げている主題のみが一致している偈、③ *Ādarśa* に類似するものが無い偈の 3 つに分類することで、より精緻な分析を行った。しかしこの方法では、修辞技法の体系の差異を明確にできない。SBA の修辞学体系において個々の修辞技法はどのように位置付けられているのか、そして SBA と *Ādarśa* でその位置付けが異なっているのかどうかを明確にすることで、SBA がサンスクリット修辞学書の細部のみを取り入れたのか、それとも修辞技法の体系全体を取り入れたのかを検討し、それにより SBA が独自の体系を確立しようとしているのかどうか推測することができる。これは、パーリ修辞学の体系がどのように形成されたのか、また、パーリ修辞学が独自性を有しているか考察することの一助となるだろう。

以上の課題を踏まえ、本稿は次の 2 点を目的とする。第一点は、SBA において用いられている例文とパーリ経典の関係を調査して、パーリ修辞学がパーリ経典とどのように関わっていたのか考察することである。第二点は、SBA において〈意味の修辞〉(*attha-alāṅkāra*) と呼ばれる一連の修辞技法がどのような体系を有し、その体系が *Ādarśa* や *Alāṅkāra* の体系とどう異なる

のか解明することである。尚、本稿ではこれら2点について、〈自然的表現〉(svabhāvavutti) という修辭技法に関する記述がなされている箇所(以下、〈自然的表現〉の節)を分析対象として検討する。この節を対象とする理由は、まず第一点に関しては、この節で用いられている例文には特徴があり、引用元の調査が容易であるからである。例えば、塩田 [2020] で取り上げた直喩の節の例文は、どこにでも見られる月並みな表現を用いており、関連する経典を特定するのは実質的に不可能である⁽¹¹⁾。しかし、〈自然的表現〉の節に挙げられている例文は釈尊の誕生に関わっており、そして釈尊の誕生に関わる経典については研究が進んでいるため、それらの仏教文献との比較が容易である⁽¹²⁾。また、第二点に関してこの節を分析する理由は、〈意味の修辭〉における〈自然的表現〉の位置付けが、SBA と他の修辭学書とで際立って異なるからである。

本稿では、はじめに SBA における〈自然的表現〉の定義と例文及び SBAPṬ の註釈を確認し、その例文とパーリ経典の関連を考察する。次に、SBA、*Ādarśa*、*Alaṅkāra* における〈意味の修辭〉の体系を概観し、〈自然的表現〉が SBA、*Ādarśa*、*Alaṅkāra* においてどのように位置付けられているのか分析し、その相違を明らかにする。

2. SBA における〈自然的表現〉とその例文

2.1. SBA における〈自然的表現〉の定義

SBA の〈自然的表現〉の節は v. 165、v. 166 の2偈からなる。その中で、SBA v. 165 及びそれへの SBAPṬ では〈自然的表現〉の定義が、SBA v. 166 では例文が次のように記されている。

【定義】 SBA v. 165 (p.157)

sabhāvavaṅkavuttīnaṃ bhedaṃ dvidhā alaṅkriyā |
paṭhamā tattha vatthūnaṃ nānāvattābhāvī | 165 ||

〈自然的表現〉と〈技巧的表現〉(vaṅkavuttii) の区別から、[意味の]修辭には2種類ある。その中で、前者は事物の様々な状態を示すものである。

【補足】 SBAPṬ on SBA v. 165 (p.157)

tattha tāsu paṭhamā sabhāvavutti vatthūnaṃ padatthānaṃ jātiṅṅakriyādabbasabhāvānaṃ nānāvicitā na dvekā va avattā avasārā vibhāvī pakāsikā viññeyyā |

「その中で」すなわちそれらのうちで、「前者」すなわち〈自然的表現〉は、「事物」すなわち普遍、属性、行為、実体をその在り方とする諸々の存在範疇の「様々な」すなわち多様な、つまり単一でない「状態」すなわち偶有的様態を「示すものである」すなわち明らかにするものである、と理解されるべきである。

【例文】 SBA v. 166 (p.158)

līlāvīkantisubhago disā thiravilokano |

bodhisattaṅkuro bhāsaṃ viroci vācam āsabhīṃ || 166 ||

麗しい歩みによって美しく、諸方をしっかりと見渡す菩薩の若芽は、偉大な言葉を発しつつ、輝いた。

v. 165 では、ab 句で〈意味の修辞〉を〈自然的表現〉と〈技巧的表現〉の2つに大別することが示され、cd 句で〈自然的表現〉の定義が「事物の様々な状態を示すもの」と示されている。そして、この定義について、SBAPT は「「事物」すなわち普遍、性質、行為、実体をその在り方とする諸々の存在範疇の「様々な」すなわち多様な」状態を示すと補足している。つまり、SBA では、〈自然的表現〉を事物が備えている様々な在り方を示すものと定義している。また、その例文として v. 166 が挙げられているが、この例文では釈尊が備える様々な在り方を示しているため、〈自然的表現〉が用いられていると言える。

2.2. SBA における例文とパーリ経典

前掲の SBA v. 166 の例文は釈尊誕生の場面を想定しているが、この偈自体はパーリ経典に見出されない。しかし、v. 166 に対する以下の註釈にはパーリ経典の参照が見られる。

SBAPT on SBA v. 166 (p.158)

disāsu dasasu thiram acalaṃ vilokanaṃ yassa so bodhisattaṅkuro tadahujāto mahābodhisatto. āsabhīṃ vācam aggo 'ham asmī ti ādikam uttamaṃ nibbhayavacanaṃ bhāsaṃ vadanto viroci visesena ramaṇīyattaṃ patto. ayaṃ sabhāvavutti. evaṃ jātisabhāvavut[t]yādayo pi parikkappaṇīyā.

十の「諸方」に対する「しっかりと」した、すなわち確固とした「見渡」しをもつ者が「菩薩の若芽」、すなわちその日に生まれた大菩薩である。[彼は]「偉大な言葉」、すなわち「私は最高者である」といった最上の恐れなき言葉を「発しつつ」、すなわち話しつつ、「輝いた」、すなわち格別の美しさを得た。これが〈自然的表現〉である。同様に、普遍の自然的表現なども考えられる。

註釈者が例示する「私は最高者である」(aggo 'ham asmi) という一節は、パーリ経典の「長部経典」(Dīghanikāya、以下 DN) に収められている『大本経』(Mahāpadanasutta) が示す、釈尊が誕生したときに発したとされる次の言葉を想定していると推測できる。

DN (p. 15)

aggo 'ham asmi lokassa, jeṭṭho 'ham asmi lokassa, seṭṭho 'ham asmi lokassa, ayam antimā jāti, n' atthi 'dāni punabbhavo.

私は世間の最高者である。私は世間の最優秀者である。私は世間の最勝者である。これは最後の誕生である。今や再生はない。

塩田 [2020] で検討した SBA の直喩の節では、「釈尊の顔は蓮のようだ」「釈尊の顔は月のようだ」といった例文が示されている⁽¹³⁾。それらは余りに月並みな表現であるため、同じ表現をパーリ経典に同定できたとしてもそこから引用したと断定することはできず、例文とパーリ経典の関係を明らかにできない。しかし、本節の v. 166 の註釈 SBAPT は DN『大本経』を想定していると考えられる。

3. 〈意味の修辞〉の体系

3.1. SBA における〈意味の修辞〉の体系

インドの修辞学では、修辞技法を一般に〈言葉の修辞〉と〈意味の修辞〉に分けて論じるが、SBA は〈意味の修辞〉を v. 164 から v. 337 で扱っている⁽¹⁴⁾。v. 164 は〈意味の修辞〉への導入であるが、この偈は〈意味の修辞〉を明確に定義せず、それが文芸において大切な要素であることを説くのみである⁽¹⁵⁾。これ以降の偈でも〈意味の修辞〉は定義されない。v. 165 は、前述の通り ab 句で〈意味の修辞〉を〈自然的表現〉と〈技巧的表現〉の2つに大別することを示し、また cd 句で〈自然的表現〉を「事物の様々な状態を示すもの」と定義している。続く v. 166 では〈自然的表現〉の例文が示され、また v. 167 では〈技巧的表現〉が次のように定義されている。

SBA v. 167 (p.158)

vutti vatthusabhāvassa yā 'ññathā sā parā bhave |

tassānantavikappattā hoti bijopadassanaṃ || 167 ||

事物の在り方の他の仕方での表現が後者（〈技巧的表現〉）である。その区分は無数にあるため、[その] 種子（すべての区分の入り口）が示される。

これに続き、v. 168 から v. 171 では、誇張描写（*atisayavutti*）や直喩、隠喩など、〈技巧的表現〉に分類される修辞技法が 35 種類列挙される⁽¹⁶⁾。このように、SBA における〈意味の修辞〉は、始めに〈自然的表現〉と〈技巧的表現〉に大別され、後者には直喩と隠喩をはじめとする修辞技法が分類されている。

3.2. *Ādarśa* における〈意味の修辭〉の体系

Ādarśa 第2章の主題は〈意味の修辭〉であり、*Ādarśa* II v. 4 から v. 7 では修辭技法 35 種類が列挙されている⁽¹⁷⁾。v. 1 から v. 3 では、修辭技法の分類を完全に説明することは困難であるが、先人たちによって分類の種子 (bīja) が示されているのでそれを *Ādarśa* で完成させること、そしてこれ以降はヴィダルバ体⁽¹⁸⁾とガウダ体⁽¹⁹⁾というふたつの文体に共通する修辭技法について示すことが記されている⁽²⁰⁾。また、v. 4 から v. 7 での修辭技法の列挙の後に、「という言葉 (vāc) の修辭が過去の聖者たちによって伝承された⁽²¹⁾」と記されているが、〈意味の修辭〉と〈言葉の修辭〉の関係は明記されていない。

SBA の体系と比較すると、SBA には存在するが *Ādarśa* には存在しない修辭技法が 3 種類、SBA には存在しないが *Ādarśa* には存在する修辭技法が 2 種類ある。また、SBA と *Ādarśa* では、それぞれの体系における〈自然的表現〉の位置付けが異なっている。SBA では、先述のとおり、〈意味の修辭〉を大別する 2 つの区分のひとつである。一方、*Ādarśa* では、35 種類の修辭技法が列挙される際、最初に〈自然的表現〉が挙げられており、それは 35 種類の修辭技法のひとつに過ぎないと考えられる⁽²²⁾。このことから、SBA は〈意味の修辭〉に分類される修辭技法を 2 段階に階層化して示しているが、一方、*Ādarśa* は〈意味の修辭〉に分類される修辭技法を階層化せずに列挙するに留めている。

3.3. *Alaṅkāra* における〈意味の修辭〉の体系

Alaṅkāra では、〈意味の修辭〉は第2章と第3章に分けて記されている。第2章では v. 21 から隠喩をはじめとする 9 種類の修辭技法が、そして第3章では v. 1 から〈歓喜〉 (preyas) をはじめとする 23 種類の修辭技法が説明されており、合計 32 種類の〈意味の修辭〉の技法が挙げられる。*Alaṅkāra* における〈意味の修辭〉の体系を SBA 及び *Ādarśa* と比較すると、その差異として次の 3 点が挙げられる。

第一点は、SBA や *Ādarśa* においては〈意味の修辭〉のひとつとして扱われている〈原因〉 (hetu、因果関係を示すことによる修辭技法) について、*Alaṅkāra* II v. 86 においては修辭技法ではないと明言されている、ということである⁽²³⁾。この違いは、SBA における〈意味の修辭〉の体系が *Alaṅkāra* のものより *Ādarśa* のものに類似していることを示唆する一例である。

第二点は、*Alaṅkāra* では独立した修辭技法として扱われている〈比喩対象の直喩〉 (upameya-upamā) が SBA では独立した修辭技法として扱われていない、ということである。*Alaṅkāra* II v. 30 から v. 65 において直喩に関する記述がなされているが、それとは別に、*Alaṅkāra* III vv. 37-38 で〈比喩対象の直喩〉が説明されている。〈比喩対象の直喩〉について、古宇田 [2009] は、*Ādarśa* に対応する偈があると指摘している。実際に、〈比喩対象の直喩〉について記す *Alaṅkāra* III v. 37 は *Ādarśa* II v. 18 に対応する⁽²⁴⁾。また、*Ādarśa* II v. 18 は SBA v. 188 と内容面で一致しているため⁽²⁵⁾、*Alaṅkāra* III v. 37 と SBA v. 188 は対応していると言える。しかし、先

行研究はこれらの対応関係を指摘するに留まり、この修辭技法の〈意味の修辭〉の体系における位置付けについては触れていない。この点を精査すると、*Alaṅkāra* では〈比喩対象の直喩〉は独立した修辭技法のひとつであるが、SBA では〈比喩対象の直喩〉は〈相互の直喩〉(*aññamañña-upamā*) と名称が変わり、そして〈相互の直喩〉は直喩の一種、という位置付けになっている。つまり、*Alaṅkāra* では独立した修辭技法として扱われている〈比喩対象の直喩〉を、SBA では独立した修辭技法と見做していないと言える。*Ādarśa* もまた SBA と同様に〈相互の直喩〉を直喩の一種として扱っているため、この点からもまた、SBA における〈意味の修辭〉の体系が *Alaṅkāra* のものより *Ādarśa* のものに近いことが見てとれる。

第三点は、*Alaṅkāra* では〈自然的表現〉が修辭技法として認められておらず、*Alaṅkāra* と SBA 及び *Ādarśa* とで〈自然的表現〉の扱いが異なる、ということである。*Alaṅkāra* では、〈自然的表現〉は *Alaṅkāra* II vv. 93-94 で導入され、v. 93 は定義を、v. 94 は例文を示している。その v. 93 に次のようにある。

Alaṅkāra II v. 93ab (Appendix p. 222)

svabhāvoktir alaṅkāra iti kecit pracakṣate |

〈自然的表現〉は修辭技法であると或る人々は言う。

ここでは、「或る人々」(*kecit*) が〈自然的表現〉は修辭技法であると主張しているのものであって、これは自説ではないことを窺わせている。また、*Alaṅkāra* II v. 66 においてこの偈以降に第 2 章で説明される修辭技法が列挙されているが、その中に〈自然的表現〉は含まれていない。これらのことから、〈自然的表現〉という修辭技法は、*Alaṅkāra* が執筆されていた時期に認知されていたが、*Alaṅkāra* の著者パーマハはそれを修辭技法として不適格であると考えていたと推測できる。したがって、SBA や *Ādarśa* は〈自然的表現〉を修辭技法のひとつとして扱っているが、*Alaṅkāra* はそれを修辭技法として認めていないと言える。〈自然的表現〉の位置付けという点に注目すると、SBA では、〈意味の修辭〉をはじめに〈自然的表現〉と〈技巧的表現〉の 2 種類に分類しており、他の修辭技法は〈技巧的表現〉に分類されている。つまり、SBA では、〈自然的表現〉は他の〈意味の修辭〉に分類される修辭技法と一線を画する存在であったと推測できる。しかし、*Ādarśa* では〈自然的表現〉は 35 種類あげられている〈意味の修辭〉に分類される修辭技法のひとつであり、*Alaṅkāra* では〈自然的表現〉は独立した修辭技法として認められていない。このことから、SBA の〈意味の修辭〉の体系は、*Ādarśa*、*Alaṅkāra* の〈意味の修辭〉の体系をそのまま受け入れたとは言い難い。

以上、SBA、*Ādarśa*、*Alaṅkāra* における〈意味の修辭〉の体系における修辭技法〈原因〉の扱い、及び〈相互の直喩〉の位置付けを勘案すると、SBA の〈意味の修辭〉の体系は *Alaṅkāra* より *Ādarśa* のそれに近いと言える。しかし、〈意味の修辭〉の体系における〈自然的表現〉の位

置付けは、SBA、*Ādarśa*、*Alaṅkāra* でそれぞれ異なっており、このことから、SBA の〈意味の修辞〉の体系は *Ādarśa* の〈意味の修辞〉の体系をそのまま受け入れたわけではなく、改変した上で受け入れたと言える。

4. 結論

以上の検討にもとづいて、まず、パーリ修辞学とパーリ経典との関連については次のことが言える。SBA v. 166 に記されている〈自然的表現〉の例文は釈尊誕生の場面に言及するが、この例文自体は、パーリ経典から引用したものである可能性は低い。しかし、同偈に対する SBAPT の註釈はパーリ経典の DN の一節を引用している。これは、パーリ修辞学とパーリ経典の結びつきを示すひとつの例である。

SBA、*Ādarśa*、*Alaṅkāra* における〈意味の修辞〉の体系の差異をまとめると、次の通りである。三者それぞれが〈意味の修辞〉に含める修辞技法の数は、SBA が 36 種類、*Ādarśa* が 35 種類、*Alaṅkāra* が 32 種類となっている。しかし、*Alaṅkāra* に記されている 32 種類の修辞技法は SBA、*Ādarśa* に全て記されている訳でなく、SBA には記されていないが *Ādarśa* には記されている修辞技法や、*Alaṅkāra* では修辞技法と認められていないが SBA や *Ādarśa* では修辞技法として数えられているものが存在する。その中で、修辞技法〈原因〉は SBA や *Ādarśa* では修辞技法のひとつとして扱われているが、*Alaṅkāra* では修辞技法として扱われていない。一方、*Alaṅkāra* のみ独立した修辞技法として挙げていた〈比喩対象の直喩〉は、SBA や *Ādarśa* では〈相互の直喩〉という直喩の一種として扱われており、〈意味の修辞〉の体系には異なりが見られる。これら 2 点から、SBA における〈意味の修辞〉の体系は *Alaṅkāra* のものよりも *Ādarśa* のものに近いと言える。

しかし、SBA、*Ādarśa*、*Alaṅkāra* における〈自然的表現〉の位置付けに注目してみると、SBA では、〈意味の修辞〉に属する修辞技法をはじめに〈自然的表現〉と〈技巧的表現〉に分類し、〈自然的表現〉以外のものを〈技巧的表現〉に分類している。このことから、SBA では〈自然的表現〉は〈意味の修辞〉に分類される修辞技法のひとつであるが、他の〈意味の修辞〉に分類される修辞技法とは一線を画する存在であったと推測できる。*Ādarśa* では、〈自然的表現〉は 35 種類あげられている〈意味の修辞〉に分類される修辞技法のひとつであり、他の修辞技法と同等に扱われている。*Alaṅkāra* は〈自然的表現〉に言及しているが、著者のパーマハは〈自然的表現〉を独立した修辞技法として認めていない。この SBA、*Ādarśa*、*Alaṅkāra* における〈意味の修辞〉の数や体系の差異を鑑みると、SBA は *Alaṅkāra* の体系より *Ādarśa* の体系に近いが、部分的な改変を施し、SBA 独自の体系を作ろうとしたと考えられる。

注

- (1) 上村 [1987: 195] 参照。
- (2) サンガラッキタについて、解明されていることは多くない。Malalasekera [1928: 196–200] によると、サンガラッキタはパラッカマバーフI世 (Parakkamabāhu I) の治世にサーリプッタ大長老 (Mahāthera Sāriputta) の教団に所属していたシンハラ人僧侶である。Fryer [1875]、南 [2016] では、サンガラッキタの生存年代を 12 世紀と想定しているが、Petra [2017] では、12 世紀中頃から 13 世紀中頃と推定している。本稿では、これらの説を勘案し、12–13 世紀頃としておく。
- (3) Malalasekera [1928: 199] 参照。
- (4) B 版を底本にテキストの校訂をした先行研究として、片山 [1977] が挙げられる。また、PTS 版を底本に用いた研究として、Wright [2002] がある。Jaini [2000: xiii] によると、PTS 版は B 版をローマナイズしたテキストである。しかし、PTS 版のテキストは瑕疵が多いため、底本として用いる場合には B 版をはじめ、他の版を参照する必要がある。
- (5) ダンディンについても、サンガラッキタ同様、解明されていることは多くない。ダンディンの生存年代は、バーマハ (Bhāmaha) との先後関係と共に議論されている。大類 [1957] では、バーマハ先行説とダンディン先行説を主張する先行研究を検証し、バーマハを 675–775 年、ダンディンを 700–800 年と推定している。辻 [1973: 109–110] によると、バーマハ (700 年頃)、ダンディン、ヴァーマナ (Vāmana, 8 世紀) の順序が認められている。いずれの年代説を採用しても、ダンディンはサンガラッキタに先行しているので、本稿ではダンディンの年代論にはこれ以上立ち入らない。
- (6) Chatterjee [1960]、片山 [1978] [1980] は、SBA と *Ādarśa* の対応箇所を示すに留まっており、両者の共通点と相違点について詳細な分析を行っているわけではない。両者の関係の詳細な分析を行ったものとしては Wright [2002] が挙げられる。
- (7) Jaini [2000: xvi] では結論のみを提示しているため、何を以って SBA の vv. 8, 26, 68 がそれぞれ *Ādarśa* I v. 2, III v. 1, II v. 4 を改良していると言えるのかは不明である。
- (8) Pollock [1998] 参照。
- (9) Bronner [2012: 70–71] がどのような根拠で *Ādarśa* がパーリ語に翻訳されたと記したのかは不明である。Bronner [2012: 71] にある註 9 はカンナダ語、シンハラ語、パーリ語、タミル語、チベット語にける *Ādarśa* の影響について言及した先行研究が列挙されている。
- (10) 塩田 [2020] 参照。
- (11) Jaini [2000: xvii] において、「釈尊の顔は月のようだ」という例文はジャータカから引用されていると指摘されているが、具体的な参照箇所は特定されていない。
- (12) 釈尊誕生に関する先行研究として、石上 [1969] や門川 [1967]、田中 [2016] が挙げられる。
- (13) 直喩の節における例文には、次のものがある。
- SBA v. 178 (p. 165)
 āyāḍipaccayā tehi vadanam paṅkajāyate |
 munindanayanadvandam nīluppaladalyati || 178 ||
 -āya 等の接辞がある。それらによって、「顔は蓮のようだ」、「牟尼王の両目は青蓮の花びらのようだ」[と喩えられる]。
- SBA v. 186 (p. 168)
 vikāsipadumam 'vātisundaram sugatānam |
 iti dhammopamā nāma tulyadhammanidassanā ||186||
 「善逝の顔は咲いた蓮のようにとても美しい」というこれは、等しい性質を示すから、共通性質の直喩と呼ばれる。
- (14) SBA の構成については、塩田 [2020] 参照。
- (15) SBA v. 164 (p. 156)
 atthāṅkārasahitā saguṇā bandhapaddhati |
 accantakantā kantā va uccante te tato 'dhuṇā || 164 ||
- (16) SBA vv. 168–172 (pp. 159–160)
 tatthā 'tisaya upamārūpakāvuttidīpakam |
 akkhepo 'tthantaranyāso byatireko vibhāvanā || 168 ||
 hetukkamo piyataram samāsaparikappanā |

samāhitam pariyāyavutti byājopavaṇṇanam || 169 ||
 visesaruḥhāhānkārā silesa tulyayogitā |
 nidassanam mahantattam vañcanā`ppakatatthuti || 170 ||
 ekāvali aññamaññam sahavutti virodhitā |
 (¹parivuttibbhamo¹) bhāvo missam āsī rasī iti || 171 ||
 ただし、(1)については B 版の読みを採用。

- (17) *Ādarśa* II vv. 4–7 (p. 20)
 svabhāvākhyānam upamā rūpakam dīpakāvṛttī |
 ākṣepo `rthāntaranyāso vyatireko vibhāvanā || 4 ||
 samāsātiśayotprekṣā hetuḥ sūkṣmo lavaḥ kramah |
 preyo rasavad ūrjasvi paryāyoktam samāhitam || 5 ||
 udāttāpahnutiśliṣṭavīśeṣās tulyayogitā |
 virodhāprastutastotre vyājastutinidarśane || 6 ||
 saḥoktiḥ parivṛtṭyāśīḥ saṁkīrṇam atha bhāvikam |
 iti vācām alaṁkārah smaryante pūrvasūribhiḥ || 7 ||
- (18) 辻 [1973: 3] によると、ヴィダルバ体は単純、明瞭、快適を特徴とする文体である。
- (19) 辻 [1973: 3] によると、ガウダ体は長い複合語と響きの強い音の多様とを特徴とする文体である。
- (20) *Ādarśa* II vv. 1–3 参照。
- (21) *Ādarśa* II v. 7: iti vācām alaṁkārah smaryante pūrvasūribhiḥ.
- (22) *Ādarśa* II v. 363 では、次のように、〈自然的表現〉と〈技巧的表現〉が対概念であるかのようになっている。
Ādarśa II v. 363 (p. 84)
 śleṣaḥ sarvāsu puṣṇāti prāyo vakroktiṣu śriyam |
 bhinnam dvidhā svabhāvoktir vakroktiś ceti vānmayam || 363 ||
 しかし、*Ādarśa* では、SBA のように直喩以下の修辞技法が〈技巧的表現〉に分類される修辞技法であるという記述は見当たらず、また〈技巧的表現〉を明確に定義する記述も見当たらなかった。*Ādarśa* において、〈技巧的表現〉がどのような位置付けとなっているのかという問題については、今後の課題としたい。
- (23) SBA では vv. 252–258 で、*Ādarśa* では II vv. 235–259 で〈原因〉を〈意味の修辞〉のひとつとして扱っている。
- (24) 古宇田 [2009] では〈比喩の隠喩〉については *Ādarśa* II vv. 88–90 参照としているが、*Ādarśa* II v. 90 は〈対照の隠喩〉という異なる修辞技法の例文を与えるものであり、正確な指摘とは言えない。
- (25) 片山 [1978]、塩田 [2020] 参照。

参考文献

一次文献及び略号

- DN *Dīghanikāya*. In *Dīgha-nikāya*, vol. II, third edition, edited by T. W. Rhys Davids and J. E. Carpenter, Oxford: The Pali Text Society, 1903 (2nd edn. 1982, 3rd edn. 1995).
- Alaṁkāra* *Kāvyālaṁkāra*. See Trivedī [1909] .
- Ādarśa* *Kāvyādarśa*. In *Daṇḍin's Poetik (Kāvjādarsa): Sanskrit und Detsch*, edited by Böhlingk, Leipzig: Verlag von H. Haessel, 1890.
- Prakāśa* *Kāvyaprakāśa*. In *Kāvyaprakāśa of Mammaṭa: With the Bālabodhinī of the Late Vamanacharya Jhalakikar*, seventh edition, edited by Raghunath Damodar Karmarkar, Poona: Bhandarkar Oriental Research Institute, 1965.
- SBA *Subodhālaṅkāra*. See Jaini [2000] .
- SBAPT *Subodhālaṅkāra Porāṇa-Ṭīkā*. See Jaini [2000] .

二次文献

- Bronner, Yigal. 2012. “A Question of Priority: Revisiting the Bhāmaha-Daṇḍin Debate,” *Journal of Indian Philosophy* 40(1): 67–118.
- Chatterjee, H. N. 1960. *Comparative Studies in Pāli & Sanskrit Alaṅkāras*, Calcutta: Sanskrit Pustak Bhandar.
- Fryer, G. E. 1875. “On Ceylon Grammarian Saṅgharakkhita Thera and His Treatise on Rhetoric,” *Journal of the Asiatic Society of Bengal* 44: 91–125.
- Gupta, D. K. 1970. *A Critical Study of Daṇḍin and His Work*, Delhi: Meharchand Lachhmandas.
- 石上善應 1969 「伝に現われた「七歩」の意味」『仏教文化研究』15: 21–36。
- Jaddipal, Viroopaksha V. 2010. “Buddhist Ālaṅkārikās and Pre-Bhāmaha Period Alaṅkārasāstra,” *Universal Message of Buddhist Tradition*, edited by R. Tripathi, Delhi: Rāṣṭriya Saṁskṛta Saṁsthān, pp. 369–387.
- Jaini, Padmanabh. S. 2000. *Subodhāṅkāra, Porāṇa-ṭīkā (Mahāsāmi-ṭīkā) by Saṅgharakkhita Mahāsāmi, Abhinava-ṭīkā (Nissaya) (Anonymous)*, Oxford: Pali Text Society.
- 門川徹真 1967 「伝における誕生偈の形成過程」『印度学仏教学研究』15(2): 140–141。
- 上村勝彦 1987 「修辞」『仏教・インド思想辞典』春秋社、pp. 195–197。
- 片山一良 1977 「SUBODĀLAṅKĀRA——パーリ修辞論——テキスト篇」『仏教研究』6: 82–49。
- 1978 「Subodhāṅkāra——パーリ修辞論——訳註篇〈上〉」『仏教研究』7: 115–154。
- 1980 「Subodhāṅkāra——パーリ修辞論——訳註篇〈下〉」『仏教研究』9: 59–84。
- 橘堂正弘 1990 「新しいパーリ語文献の展望—Pāli text printed in Sri Lanka in Sinhalese character」『パーリ文化学の世界』水野弘元博士米寿記念論集、春秋社、pp. 45–89。
- 1997 『スリランカのパーリ語文献』山喜房仏書林。
- 古宇田亮修 2009 「Bhāmaha 著 Kāvyaṅkāra『詩の修辞法』第3章—テキストならびに訳註—」『長谷川仏教文化研究所年報』33: 49–67。
- Malalasekera, G. P. 1928. *The Pali Literature of Ceylon*, Colombo: M. D. Gunasena & Co.
- 南清隆 2016 「1.13 パーリ語文法と辞典」『上座仏教事典』パーリ学仏教文化学会 上座仏教事典編集委員会編、めこん、p. 58–63。
- Monius, Anne E. 2000. “The Many Lives of Daṇḍin: The Kāvyaḍarśa in Sanskrit and Tamil,” *International Journal of Hindu Studies* 4(1): 1–37.
- 森祖道（編）1974 『国際仏教徒協会蔵 パーリ語文献分類目録』国際仏教徒協会。
- 大類純 1957 「バーマハとダンディンをめぐりて」『東洋大学紀要』10: 25–34。
- Petra, Kieffer-Pülz. 2017. “Saṅgharakkhita Mahāsāmi’s Oeuvre Based on Intertextual Links in His Texts” 『創価大学国際仏教高等研究所年報』20: 23–55。

Pollock, Sheldon. 1998 “The Cosmopolitan Vernacular,” *The Journal of Asian Studies* 57(1): 6–37.

塩田宝澍 2020 「パーリ修辭学書 *Subodhālaṅkāra* における直喩理論」『東海仏教』65: 1-17。

田中典彦 2016 「十方七歩と誕生偈」『佛教大学仏教学会紀要』21: 31-55。

Trivedī, Kamalāśaṅkara Prāṇaśaṅkara. 1909 *The Pratāparudrayaśobhūshaṇa of Vidyānātha with the Commentary, Ratnāpaṇa, of Kumārasvāmin, Son of Mallinātha, and with a Critical Notice of Manuscripts, Introduction, Critical and Explanatory Notes and an Appendix Containing the Kāvyaḷaṅkāra of Bhāmaha*, Bombay Sanskrit and Prakrit Series 65, Bombay: Government Central Press.

辻直四郎 1973 『サンスクリット文学史』岩波全書 277、岩波書店。

和田悠元 2000 「インド古典修辭学における隱喩 (rūpaka) について—ダンディン著『美文体の鏡』における用例—」『インド論理学研究』1: 333–346。

Wright, J. C. 2002 “The Pali Subodhālaṅkāra and Daṇḍin’s Kāvyaḷadarśa,” *Bulletin of the School of Oriental and African Studies* 65(2): 323-341.